

川口 順子

環境大臣

1965年 東京大学教養学部教養学科国際関係論分科卒業。1972年 エール大学経済学部大学院修士 (Master of Philosophy取得)。1965年 通商産業省入省。1990年 通商産業省通商政策局経済協力部長。1990年 外務省在アメリカ合衆国日本大使館公使。1992年 通商産業大臣官房審議官 (地球環境問題担当)。この間、国際復興開発銀行勤務 (1976年~1978年)。1993年 サントリー株式会社 常務取締役、一貫して生活環境部を担当。2000年 環境庁長官 就任。2001年 環境大臣 就任。その他の主な履歴は、行政改革推進本部規制改革委員会 委員、文部省中央教育審議会 委員、文部省大学審議会 委員、通商産業省産業技術審議会 臨時委員、経済同友会特別会員、国際交流基金日米センター評議会 評議員、日米欧委員会 日本委員、財団法人日本国際交流センター 理事、等。

橋本 昌

茨城県知事

東京大学法学部卒業、自治省入省 (1969)、福井県文書学事課長、地方課長、財政課長、山梨県総務部長を経験。国土庁防災局防災調整課長、自治省消防庁危険物規制課長、消防課長、自治省財政局公営企業第一課長を歴任。茨城県知事 3 期目 (1993~)。

馳 浩

衆議院議員

1984年 専修大学文学部国文学科卒業。1984年 星陵高校国語科教員ロスアンゼルスオリンピックにおいて、レスリング選手として出場 (1984年)、プロレスラー (1985)、文筆家 (日本文学風土学会会員)、参議院議員 (1995)、衆議院議員 (2000)。自民党環境部会化学物質対策小委員会 委員長。

加藤 修一

参議院議員

1981年 北海道大学大学院地球環境科学研究科終了 学術博士号取得。北見工業大学 助手、(株)たくぎん総合研究所次長、小樽商科大学教授 (地球環境経済)、参議院議員 (1995)、GLOBE、GEA実行委員自然エネルギー促進議員連盟 (超党派) 事務局長、公明党エコジャパン事務局長。

ボー ヤンセン

スウェーデン ストックホルム大学 応用環境調査研究所 教授

ストックホルム大学化学物質環境分析学教授。1970年代初期より、環境中の持続性有機化合物の同定および化学分析法の開発に携わる。現在、主にUNEP、WHO、EU委員会、欧州環境庁、海洋調査国際評議会など国際組織のアドバイザーを務めている。国や地方自治体との連携も重要であると考えている。

安達 一彦

環境省 総合環境政策局 環境保健部環境安全課長

1979年 東京大学医学部卒業。同年、厚生省医務局国立病院課。1985年 厚生省保健医療局結核難病課課長補佐。外務省在フィリピン日本国大使館、厚生省健康政策局、同保健医療局、同老人保健福祉局、同大臣官房厚生科学課、1994年 鹿児島県保健環境部長、科学技術庁原子力安全局放射線安全課企画官、宇宙開発事業団企画部主任開発部員を経て、2001年7月より現職。

田辺 信介

愛媛大学 沿岸環境科学研究センター 教授

1975年 愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了。1977年 愛媛大学農学部助手。1985年 農学博士 (名古屋大学)。1988年 愛媛大学農学部助教授。1995年 愛媛大学農学部教授。1999年より愛媛大学沿岸環境科学研究センター教授。1985年 日本海洋学会岡田賞受賞。1999年 日産科学賞受賞。2000年 ISI引用最高荣誉賞 (環境化学分野) 受賞。環境ホルモンによる地球規模の環境汚染と野生生物およびヒトに対する影響について研究。主な著書に、「環境ホルモン—何が問題なのか—」岩波ブックレットNo.456、岩波書店 (1998) がある。

森 千里

千葉大学大学院 医学研究院 環境生命医学 教授

京大医博 (1989年 7 月24日)。平成 7 年解剖学会奨励賞を受賞。昭和59年 3 月 旭川医科大学卒業、昭和59年 5 月 京都大学助手 (医学部解剖学第 3 講座)、平成 2 年 7 月 米国国立衛生研究所環境健康科学研究所 (NIH/NIEHS)、Visiting Associate、平成 4 年 5 月 京都大学助教授 (大学院医学研究科生体構造医学講座)、平成 12 年 4 月 千葉大学医学部教授、平成13年 4 月 千葉大学大学院医学研究院教授、現在に至る。出版物：よくわかる環境ホルモン学 (分担；環境新聞社)、循環型社会 科学と政策 (分担；有斐閣)。

横田 弘文

財団法人化学物質評価研究機構 久留米事業所

1991~1993年 広島大学大学院生物圏科学研究科 博士過程前期。1998~2001年 九州大学大学院生物資源環境科学科 博士後期過程。1993年より、財団法人 化学物質評価研究機構。専門分野：生態毒性学。

青山 博昭

財団法人残留農薬研究所 毒性第一部 生殖毒性研究室 室長

1978年 名古屋大学農学部卒業 (家畜育种学専攻)、1993年 博士 (農学、名古屋大学大学院)、1994年 日本先天異常学会奨励賞受賞、1994年 8 月~ 米国国立環境保健科学研究所 (NIEHS、実験病理学研究室) 留学、1997年 3 月~2001年12月現在 (財) 残留農薬研究所毒性第一部生殖毒性研究室室長。

近藤 昭宏

宝酒造株式会社 バイオ研究所 主任研究員

1980年 岐阜大学農学部卒業、1982年 岐阜大学農学部農学研究科修了(修士)、1994年 岐阜大学連合大学院修了(博士)、1982年 宝酒造株式会社入社、1986~1989年 大阪大学理学部 研究生、1994~1995年 米国サイテル社 訪問研究者、1995年より現職。

有菌 幸司

熊本県立大学 環境共生学部 食・健康環境学 教授

最終学歴は、長崎大学大学院薬学研究科(修士課程)薬学専攻修了(1979年3月)。薬学博士(1986年1月・九州大学)。1973年3月鹿児島県立川辺高校卒業、1973年4月 第一薬科大学製薬学科入学、1977年3月 第一薬科大学製薬学科卒業、1977年4月 長崎大学大学院薬学研究科修士課程薬学専攻入学、1979年3月 長崎大学大学院薬学研究科修士課程薬学専攻卒業。1979年4月 長崎大学薬学部衛生化学教室助手、1985年6月 長崎大学薬学部講師、1993年3月 長崎大学薬学部衛生化学教室助教授、1997年10月 長崎大学環境化学部助教授、1999年4月 熊本県立大学教授、以上現在に至る。著書は、線虫を用いる試験法 井上達監修 内分泌攪乱化学物質の生物試験研究(分担執筆)、環境ホルモン(内分泌攪乱物質)の魚類への影響、ピデロジェニンをバイオマーカーとして(環境技術、29)など。

森田 昌敏

独立行政法人国立環境研究所 統括研究官

昭和42年3月 東京大学理学部化学科卒業、昭和47年3月 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(合成化学)(工学博士)。昭和47年4月 東京都立衛生研究所 水質研究課研究員。昭和53年11月 国立公害研究所 計測技術部生体化学計測研究室 主任研究員、昭和55年7月 同研究所 計測技術部生体化学計測研究室室長、平成元年4月 同研究所 計測技術部長。平成2年7月 国立環境研究所 化学環境部長(所内組織変更による)、平成7年4月 同研究所 地域環境研究グループ 統括研究官。平成13年4月 独立行政法人国立環境研究所 統括研究官、現在に至る。昭和55年~ 東京大学医学部非常勤講師(衛生学)、平成10年 東京大学理学部非常勤講師(化学科)、平成元年~ 環境庁中央環境審議会専門委員、平成10年~ 厚生省中央薬事審議会専門委員、他多数を併任。専門分野は、分析化学、環境科学、毒性学。

大石 芳野

フォトジャーナリスト

フォトジャーナリストとして、戦争・戦乱での人間の心身や環境の破壊についてなどを取材し続けている。1966年 日本大学芸術学部写真学科を卒業と同時にフリーランスとなる。1982年 日本写真家協会年度賞を「無告の民」にて受賞。1989年 日本写真家協会年度賞を「夜と霧は今」にて受賞。写真150年顕彰。1990年 講談社出版文化賞、アジア・アフリカ賞を受賞。1994年 芸術選奨文部大臣新人賞、日本地名研究所(風土賞)を受賞。日本ジャーナリスト会議(奨励賞)を「カンボジア苦界転生」にて受賞。1998年 児童福祉文化賞(大賞)を「活気あふれて 長い戦争のあと」にて受賞。2001年第20回土門拳賞を「ベトナム 凜と」にて受賞。

養老 孟司

北里大学大学院 医療人間科学 教授

1962年、東京大学医学部卒業。同大学院医学研究科基礎医学専攻博士課程修了、医学博士。卒業後はインターンを1年間経験して解剖学教室に入り、標本づくりと基礎データの積み上げに従事する。その間、形態、言語、数学、時間などさまざまなことから、すべて脳の働きに関わる現象としてとらえ、ヒトの精神活動や脳内過程の解明をめざす。特に作家の文章の分析など、言語表現の研究を通して、その活動をしだいに文学的、哲学的領域へと拡げていった。一方で、ヒトのからだをめぐるユニークなエッセイも発表し、人気を博す。1989年、『からだの見方』でサントリー学芸賞を受賞。1991年に東京大学出版会理事長就任。1995年、定年を待たずに東京大学教授を退官した。現在、執筆やTV出演などで活躍。専門領域をわかりやすく解説する話術に定評がある。主な著書に『ヒトの見方』、『脳の中の過程』、『涼しい脳味噌』、『唯脳論』、共著に『中枢は末梢の奴隷』、『恐竜が飛んだ日』などがある。

河野 一郎

筑波大学 体育科学系教授

昭和48年、東京医科歯科大学医学部卒業。平成11年より、筑波大学体育科学系スポーツ医学教授。平成13年より日本オリンピック委員会理事。平成13年より、(財)日本アンチ・ドーピング機構理事長。平成12年より、世界アンチ・ドーピング機構標準・調和委員会委員。ソウルオリンピック、バルセロナオリンピック、アトランタオリンピック、日本代表選手団チームドクター。

合原 一幸

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 教授

昭和29年(1954年)6月23日生。昭和48年(1973年)ラ・サール高校卒業、昭和52年(1977年)東京大学工学部電気工学科卒業、昭和57年(1982年)東京大学大学院工学系研究科電子工学専門課程博士課程修了(工学博士)。東京電機大学工学部助教授、西オーストラリア大学数学科 客員教授、北海道大学電子科学研究所客員 助教授、東京大学大学院工学系研究科計数工学専攻 教授などを経て、現在、東京大学大学院新領域創成科学研究科教授 および同工学部計数工学科 教授、放送大学客員教授。

谷田部雅嗣

NHK 解説委員室 解説委員

昭和25年(1950年)3月14日生まれ。昭和48年(1973年)3月北里大学衛生学部化学科卒。昭和48年4月NHK入局、ディレクターとして科学番組の企画制作に携わる。平成9年6月より現職。科学分野担当：生命科学、医学、環境、原子力、科学技術一般。主な制作担当番組は、NHKスペシャル 生命 40億年はるかな旅、第三集 魚たちの上陸作戦(94年6月放送)、第九集 ヒトは何処へ行くのか(95年2月放送)、NHK特集 地球汚染 第二集 海はひそやかに警告する(89年3月放送)。主な著書は、地球汚染② 海はひそやかに警告する 共著(NHK出版)、脳死 生と死の選択 日本で心臓移植は可能か 共著(NHK出版)、生命 40億年はるかな旅② 魚たちの上陸作戦 共著(NHK出版)、生命 40億年はるかな旅⑤ ヒトは何処へ行くのか 共著(NHK出版)。

岩尾總一郎

環境省 総合環境政策局環境保健部長

1973年 慶応大学医学部卒業。1978年 米国テキサス大ヒューストン校留学。1981年 産業医科大学医学部助教授。1985年 厚生省入省。佐賀県保健環境部長（1988年）、環境庁環境保健部特殊疾病対策室室長（1990年）、厚生省薬務局医療機器開発課長（1992年）、同保健医療局疾病対策課長（1993年）、同保健医療局エイズ結核感染症課長（1995年）、同健康政策局健康開発振興課長（1997年）、同保健医療局地域保健・健康増進栄養課長（1998年）、同大臣官房厚生科学課長（1999年）を経て、2001年環境省総合環境政策局環境保健部長。

ジョン ピーターソン マイヤーズ

米国 W. アルトン ジョーンズ財団 ディレクター

内分泌攪乱化学物質に対する世界的な関心を引き起こした「奪われし未来」の共著者。地球環境保護と核戦争阻止に力を入れている私設財団であるW. アルトン ジョーンズ財団のディレクターを務めている。過去に国立鳥類研究学会の科学副委員長を務めた。カリフォルニア大学バークレー校にて動物学の博士号を取得。現在、バージニア州シャーロットビル近郊に在住。

黒田洋一郎

財団法人東京都医学研究機構 東京都神経科学総合研究所 分子研究系 分子神経生物学研究部門部門長、参事研究員

東京大学農学系大学院博士課程修了。医学博士。ロンドン大学精神医学研究所客員研究員を経て1995年より現職。フランス神経化学研究センター、米国ノースウェスタン大学医学部などでも共同研究。分子細胞神経生物学、神経毒性学を専攻。主にヒトの記憶の分子・細胞メカニズム、ことにシナプスの可塑的な変化を研究しているが、老化に伴う記憶障害を特徴とするアルツハイマー病など臨床面とのかかわりにも目を向けている。最近、記憶などヒト脳の高次機能の発達メカニズムにも興味を持ち、その分子・遺伝子レベルの調節の多様な繊細さから環境由来の化学物質による脳機能発達の攪乱の可能性を憂慮している。科学技術振興事業団戦略的基礎研究推進事業「内分泌かく乱化学物質」研究領域の研究代表者。著書に「アルツハイマー病」（岩波新書）、「脳と神経の科学」共著（オーム社）など。

バーナード ワイス

米国 ロチェスター大学医歯学部 環境医学・小児科学 教授

ロチェスター大学医歯学部 環境医学・小児科学 教授。編集者・共編者を務めた書籍・単行書は7冊、著者・共著者として発表した論文数は200を超える。主な研究領域は行動に対する化学物質の影響。鉛、水銀、マンガンなどの金属、トルエン、メタノールなどの溶剤、コカインなどの薬物、オゾンなどの大気汚染物質、ダイオキシンなどの内分泌攪乱化学物質の神経行動毒性を研究している。米国環境保護局科学顧問委員会を始め、毒物学や環境衛生に関する数多くの委員会の委員を務めている。

遠山 千春

独立行政法人国立環境研究所 環境健康研究領域長

1972年 東京大学医学部保健学科卒業。1981年 ロチェスター大学医学系大学院毒性学専攻（Ph.D.）。1981年 環境庁国立公害研究所環境保健部研究員。1992年 国立環境研究所環境健康部病態機構研究室長。1994年 同部長。2001年 筑波大学連携大学院教授（併任）。国内外の専門家会議のメンバーを務める。主な研究分野：ダイオキシン及び内分泌攪乱化学物質リスクアセスメント（1999年戦略的基礎研究「内分泌攪乱物質」チーム代表）。重金属（メタル水銀、カドミウム）の毒性。メタロチオネインの生理学的、毒性学的意義の解明。

R. トーマス ゴラー

米国 マサチューセッツ大学 生物学科 教授

インディアナ大学にて生物学専攻、理学士号取得。オレゴン州立大学にて内分泌学博士号取得。国立精神衛生研究所細胞生物学研究室においてポストドクトラルフェローとして研究を行った後、国立神経障害・卒中研究所の神経化学研究室スタッフとなる。ミズーリ大学医学部医学科を経て、現在マサチューセッツ大学アマースト校教授。米国EPA内分泌攪乱化学物質のスクリーニングとテストに関するワークグループの常任メンバー。

鯉淵 典之

群馬大学 生理学第一講座 教授

1985年 群馬大学医学部卒業、1989年 群馬大学内分泌研究所生理学講座にて医学博士取得、同年より米国ロックフェラー大学博士研究員。1990年12月より獨協医科大学助手（生理学）、同講師を経て1996年7月よりハーバード大学医学部（プリガム女性病院医科学講座遺伝学部門）客員助教授（獨協医大と兼任）、1999年11月 獨協医科大学助教授、2001年4月より現職。1997年 北米甲状腺学会賞、2000年 北米内分泌学会若手奨励賞、他受賞。専門は、内分泌生理学及び発達生理学。

吉川 泰弘

東京大学 大学院農学生命科学研究科 教授

1971年 東京大学農学部獣医学科卒業。1976年 東京大学農学系大学院 獣医病理学博士課程修了。1976年 国立予防衛生研究所入所麻疹ウイルス部。1977-1979年 ドイツ、ギーセン大学ウイルス研究所留学。1980年 東京大学医科学研究所 助手その後講師、助教授。1991年 国立予防衛生研究所 筑波霊長類センター 所長。1997年 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授、現在に至る。専門分野は、実験動物学、毒性学、霊長類学。

デボラ C. ライス

米国 環境保護庁 (EPA) 国立環境アセスメントセンター 上席毒物学者

ロチェスター大学にて毒物学で博士号取得。現在、環境保護庁国立環境アセスメントセンターで神経毒性学の分野のリスクアセスメントを担当、メチル水銀とPCB類のヘルシアセスメントに携わっている。以前はヘルスカナダ毒物学研究部門の研究者として、主要な環境汚染物質である鉛、メチル水銀、PCB類への発達期の曝露に起因する神経系の障害の特性評価に関する研究プログラム責任者を務めた。現在、Neurotoxicology、Neurotoxicology and Teratology、Environmental Researchの編集委員を務める。特定の化学物質の神経毒性作用、神経毒性研究の方法論的接近法、およびリスクアセスメントの分野の著者・共著者として発表した研究論文・ブックチャプターは100本を超える。

ハーマン B.W.M. クーター

OECD 環境衛生安全課 主任行政官

1991年11月よりOECD環境衛生安全課の主任行政官を務めている。OECDプログラム（試験ガイドラインプログラム、分類と表示のハーモナイゼーションに関するプログラム、内分泌攪乱化学物質に関するOECDの特別活動、動物福祉の方針に関するOECDの特別活動）のプログラム・ディレクターでもある。主な任務は、それぞれのプログラムの目的を達成するために、政治・技術レベルにおいて加盟国代表、国際機関代表、および非加盟国、NGO、業界団体、労働組合の代表らと緊密に協力して活動することである。ヒトの健康への危険性とリスクアセスメントに関する方針および技術的問題に関し、OECDのシニアアドバイザーも務めている。

ジェームズ W. オーウェンズ

米国 プロクターアンドガンブル社 マイアミバレー研究所 セントラル製品安全部門 主席科学者

米国セントルイスのワシントン大学にて分子生物学で博士号を取得。専門分野は、ハザードの同定、ハザードの特性評価、およびリスクアセスメントに適用する毒性評価法の開発、標準化、および妥当性評価である。現在の研究分野は、化学物質の内分泌作用を評価および判定する方法である。米国環境保護庁 (USEPA) の標準化と妥当性評価に関する特別委員会の委員を務めた経験があり、現在は米国環境保護庁の内分泌攪乱化学物質試験の妥当性検討諮問委員会に所属している。また、内分泌攪乱化学物質の試験とアセスメントに関するOECD特別委員会の哺乳動物妥当性検討グループにも参加している。

ダニエル B. ピックフォード

英国 アストラゼネカ社 世界安全衛生環境部門 ブリクスハム環境研究所 研究科学者

両生類を主とする下等脊椎動物の生殖生物学および内分泌学の分野で7年以上の研究経験を有する生物学者。主な研究領域は、内分泌攪乱化学物質が生殖および内分泌機能に及ぼす影響に関するもの。室内の研究活動に加えて、ボリビアのアマゾン雨林やフロリダの湿地帯において広範囲に及ぶ実地調査も行っている。両生類生態毒物学に関するBELリサーチプログラムを指揮しており、同プログラムには、エストロゲン様物質および甲状腺活性物質による幼生発生の攪乱に関する研究ならびに両生類における新たな毒性試験の開発が含まれる。リサーチユニットのメンバーとして、他の内分泌攪乱化学物質研究プロジェクトも支援しており、バイオマーカー (VTG酵素免疫測定法など) の開発と使用方法について技術支援を行っている。欧州化学物質毒性センター (ECETOC)、欧州化学工業協会 (CEFIC-EMSG)、経済協力開発機構 (OECD) などの複数の国際的な生態毒性学活動に加わっている。SETACおよび減少する両生類に関する特別委員会 (Declining Amphibians Task Force) のメンバーを務め、魚と両生類に関する実験について UK Government Home Office License を取得している。

和田 勝

東京医科歯科大学 教養部 生物学 教授

1969年 東京大学理学部動物学卒業 理学士。1974年 東京大学大学院理学系研究科動物学専門課程博士修了 理学博士。日本学術振興会奨励研究員採用。1974年 アメリカワシントン大学動物学部Research Associate採用。1975年 東京医科歯科大学医用器材研究所制御機器部門助手採用。1984年 同大学教養部助教授、1987教授昇任、現在に至る。専門は動物学、比較内分泌学。所属学会：日本動物学会 (評議員)、日本比較内分泌学会 (幹事)、日本鳥学会など。主な研究領域は、野生鳥類を用いた繁殖戦略の研究、ウズラの繁殖内分泌学の研究、内分泌攪乱化学物質の鳥類への影響など。

内山 実

富山大学 理学部生物学科 教授

1972年 富山大学文理学部理学科卒、1982年 理学博士 (北海道大学)。1972年-1979年日本歯科大学新潟歯学部 助手、1979年-1981年米国テキサス工科大学医学部健康科学研究所 客員研究員、1981年 蘭国ナイメーヘン大学理学部 客員研究員、1981年 日本歯科大学新潟歯学部 講師、1982年 日本歯科大学新潟歯学部 助教授、1995年 富山大学理学部 教授、現在にいたる。

菅野 純

国立医薬品食品衛生研究所 安全生物試験研究センター 毒性部 室長

1981年 東京医科歯科大学医学部医学科卒業。1985年 東京医科歯科大学大学院医学研究科博士課程終了、人体病理学、実験病理学を専攻。1986年より東京医科歯科大学医学部病理学第二講座助手。1991-1993年 米国NIH客員研究員（実験病理学）として研究に従事。1995年より東京医科歯科大学医学部感染免疫病理学講座文部教官講師。1997年より国立医薬品食品衛生研究所・毒性部室長に就任。おもに内分泌に関連した分子毒性学的研究に力を入れている。実験法に関連しては、厚生労働省厚生科学研究内分泌かく乱化学物質 HTPS/QSAR 班、OECDによる子宮肥大試験バリエーションプロジェクトのリードラボラトリーの実務面をうけもっている。

ロバート J. カブロック

米国 環境保護庁 (EPA) 国立衛生環境影響研究所 生殖毒性学部門 ディレクター

1977年に博士号を取得し、12年前よりリサーチトライアングルパークにある環境保護庁国立衛生環境影響研究所の生殖毒性学部門のディレクターを務める。研究領域は、奇形発生、発生生理学、発生薬物動態学、生殖毒性学、および量的リスクモデルである。多数の著書があり、この6年間はEPAの内分泌攪乱化学物質研究プログラムにおいて様々な役職に就いていた。毒性学会、奇形学会、国立公衆衛生研究所のALTX4研究部等、様々な団体のメンバーや役員として活躍している。現在、奇形学会の代表を務め、デューク大学とノースカロライナ州立大学でも指導にあたっている。

ウェイダ トン

米国 FDA 国立毒性学研究センター (NCTR) Logicon ROW Sciences 計算科学グループ主任

米国FDA国立毒性学研究センター (NCTR) に属するLogicon ROW Sciencesの計算科学グループの主任を務める。また、アーカンソー大学医学部薬学科の客員助教授も務める。1990年に博士号を取得し、ミズーリ大学セントルイス校で6年間、計算化学の研究に従事した。1996年にNCTRの学術的研究チームに参加し、リスク評価のための計算毒性ツールの開発や、ゲノム科学およびタンパク質科学への生物情報学的研究を行っている。

富岡 伸夫

株式会社医薬分子設計研究所 取締役・生物情報部長

1988年：東京大学薬学系研究科博士課程修了。1990年～1995年：東京大学薬学部医薬分子設計学講座助手。1995年：株式会社医薬分子設計研究所の設立に参画。現在、同社取締役・生物情報部長として、コンピュータを用いた薬物設計法及びバイオインフォマティクスシステムの開発に従事。

板井 昭子

株式会社医薬分子設計研究所 代表取締役社長

武吉 正博

財団法人 化学物質評価研究機構 安全性評価技術研究所 研究第1部 研究第2課 課長

1984年 山口大学大学院農学研究科修士課程修了（農学修士）。1984年より財団法人 化学物質検査協会（現：(財)化学物質評価研究機構）に勤務、以後毒性学研究に従事。1995年 博士号取得（山口大学大学院連合獣医学研究科博士課程、獣医学博士）。現在、安全性評価技術研究所 研究第1部 研究第2課 課長。

ブルース ブルンバーク

米国 カリフォルニア大学 発生・細胞生物学科 助教授

1976年にニュージャージー州カムデンのラトガース大学にて生物学で学士号を取得。修士課程はUCLAの生物学科で修了し（専攻は細胞外マトリックスの生化学と分子生物学）、1987年に博士号を取得した。ニュージャージー医科歯科大学ロバートウッドジョンソン医学校（1987～1988年、細胞外マトリックス）で1年間のポスドク課程を修了した後、UCLA医学部生化学科に入った（1988-1992）。UCLAでは主に脊椎動物発生の分子発生学の研究を行った。1992年にソーク研究所のロン エヴァンスのグループに研究職員として参加し、オーファン核レセプターのリガンドの同定を行う。1998年、カリフォルニア大学アーバイン校に入り、これまで行っていた発生におけるレチノイドとオーファン核レセプターの役割に関する研究を続けた。内分泌攪乱についての関心が高まり、特にカエルの奇形を誘発する際の環境中のレチノイド類の役割、環境中のエストロゲンとステロイドと生体異物レセプターSXRの間の相互作用に関心を持つようになる。この他の主要な研究分野は、機能的ジェノミクスに対する高スループットのアプローチである。

ジュリアン M. ホール

米国 国立環境衛生科学研究所 生殖・発生毒性研究室 ポスドクター研究員

コネチカット州ハートフォード市のトリニティ大学にて1994年に生物学学士号を取得。続いてデューク大学大学院の細胞・分子生物学の博士課程に進学し、ドナルド・マクドネル博士の研究室において、エストロゲン受容体 α と β の分子薬理学の研究に従事し、エストロゲン受容体の生物学的研究の手法としてのコンビナトリアル・ファージ・ディスプレイの開発に携わった。2000年に薬理学と腫瘍生物学で博士号を取得し、現在は国立環境衛生科学研究所のケン・コラック博士の下でポスドクター研究員として研究を続けている。

井上 達

国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター センター長

1970年 横浜市立大学医学部卒業。1974年 横浜市立大学大学院医学研究科修了、病理学・血液学・放射線生物学を専攻。1983年～1994年 横浜市立大学医学部助教授。1994～1995年 科学技術庁放射線医学総合研究所生理病理部室長。1995年より国立医薬品食品衛生研究所（国立衛生試験所、当時）安全性生物試験研究センター 毒性部長、2001年より同センター長。研究テーマは、分子生物学を取り込んだトキシコロジー、特にトキシコジェノミクスの構築。日本癌学会、日本病理学会、日本血液学会等の評議員。日本トキシコロジー学会、日本疾患モデル学会、日本内分泌攪乱化学物質学会等の理事。

小原 雄治

国立遺伝学研究所 生物遺伝資源情報総合センター 教授

1974年 京都大学理学部卒業、1979年 名古屋大学大学院理学研究科博士課程(分子生物学)単位取得退学、1987年 理学博士(名古屋大学)。1980年 名古屋大学理学部附属分子生物学研究施設・助手、1988年—1990年英国 MRC。分子生物学研究所・客員研究員、1989年 国立遺伝学研究所遺伝情報研究センター・助教授、1996年 同・構造遺伝学研究センター・教授、1998年 同・生物遺伝資源情報総合センター・教授、センター長、1990年より総合研究大学院大学生命科学研究科遺伝学専攻・教授併任。専門分野：分子生物学、ゲノム生物学。

ティム ウィリアムズ

英国 バーミンガム大学 生物学部 特別研究員

パース大学にて生化学で学士号、ウォーリック大学にて生物科学で博士号を取得し、1997年にバーミンガム大学で研究職に就いた。専門とする研究分野は、環境因子に反応した遺伝子発現とタンパク発現の変化である。また、原始生物における無機栄養増殖とバクテリアにおける水銀耐性も含まれる。現在、ケビン・チップマン教授と共同で、DNAマイクロアレイを使用して、海水魚、ヨーロッパヒラメにおける環境汚染の影響を調査している。NERCと欧州連合の資金的支援を受け、国際的なレベルで研究の発表と出版を行っている。

成瀬 清

東京大学 大学院理学系研究科 助手

昭和57年 名古屋大学理学部卒業後、東京大学大学院理学系研究科で博士号を取得、現在は東京大学大学院理学系研究科助手。学部、大学院時代から現在まで「メダカ遺伝子地図の作成」と「メダカとその仲間たちの系統と進化」の2つをテーマとして研究を行っている。現在の関心は生物学における網羅的解析の可能性と限界について。主な出版物は蛋白質核酸酵素別冊「小型魚類研究の新展開」45巻(17号)(2000)。

ティモシー リチャード ザカロフシキー

米国 ミシガン州立大学 生化学・分子生物学科、国立食品安全性・毒性センター 準教授

ミシガン州立大学生化学・分子生物学科及び国立食品安全性・毒性センター準教授。テキサスA&M大学S. Safe研究室にて毒物学で博士号取得。カナダ医学研究評議会ポストドクトラルフェローとして、フランスのストラスブールにてピエール・シャンボン教授との研究活動に従事。1992年西オンタリオ大学薬理学・毒物学助教授に就任。主な研究領域は、分子毒物学、構造生物学、内分泌攪乱化学物質に関連したトキシコジェノミクス。

渋谷 淳

国立医薬品食品衛生研究所 病理部 室長

昭和60年に東京農工大学で獣医学を専攻(修士)、平成元年に東京医科歯科大学で病理学を専攻(医学博士)した。その後、国立衛生試験所のリサーチ・レジデントとしてヒト脳腫瘍の実験モデルに関する研究、平成5年より米国NIH国立小児研究所にて神経細胞分化過程での細胞増殖制御に関する研究に従事した。平成10年より国立医薬品食品衛生研究所病理部室長として現在に至り、主に神経傷害や発癌に関する実験病理研究を行っている。

ジョージ ダストン

米国 プロクターアンドギャンブル社 マイアミバレー研究所 特別研究員

胚、胎児、および小児に対する化学物質の影響について研究を行っている。1985年にプロクターアンドギャンブル社に入社。90件以上の科学論文を発表し、3冊の書籍を編集した。専門とする研究には、内分泌攪乱化学物質スクリーニングに導入するゲノム分析法が含まれる。専門家としての活動には、毒性学会の生殖毒性および発生毒性に関する専門部門(Reproductive and Developmental Toxicology Specialty Section)代表および奇形学会代表などがある。チルドレンズホスピタル研究財団の小児科の助教授を務めている。1993~94年には、ソーク研究所の客員研究員を務めた。1999年には、米国科学振興協会(AAAS)特別研究員に選出された。

井口 泰泉

岡崎国立共同研究機構 統合バイオサイエンスセンター 教授

昭和49年 岡山大学理学部卒、昭和51年 岡山大学大学院理学研究科修士課程修了(理学修士)、昭和56年 東京大学 理学博士、昭和56年~58年 カリフォルニア大学バークレー校癌研究施設、動物学教室博士研究員、昭和62年 横浜市立大学文理学部助教授、平成4年 横浜市立大学文理学部教授、平成7年 横浜市立大学理学部教授(学部改組)、平成12年 岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所 統合バイオサイエンスセンター教授。環境省、国土交通省、厚生労働省、経済産業省等の委員。研究分野は、内分泌学。周生期のマウス生殖器官を用いてエストロゲンによる細胞増殖・発ガン・細胞死機構の研究や魚類を用いた環境ホルモンの発生分化に対する影響などについて研究。主要著書は、Toxicity of Hormones in Perinatal Life -CRC Press、器官形成(共著)-培風館、生殖異常 -かもがわ出版、メス化する自然(監修)-集英社、よくわかる環境ホルモнолог(共著)-環境新聞社、環境ホルモンを考える -岩波書店。

マイケル H. デプレッジ

英国 プリマス大学 プリマス環境研究センター 環境毒性学 教授

1975年 ロンドン大学生物科学科で最優等学位(理学士号)を取得。海洋無脊椎動物の生理学の研究により、博士号を取得。1979年王立マーズデン病院に入り、骨髄移植後の白血病患者における肺損傷の発生について調査した。1983年 香港大学に移り、比較生理学と生態毒性学の研究を再開した。現在プリマス環境研究センター所長。査読付きの国際学術誌に200以上の論文発表を行っている。ハーバード大学名誉教授。国連および世界保健機関のアドバイザー。

マーク E. ハーン

米国 マサチューセッツ州ウッズホール海洋研究所 (WHOI) 生物学部門 専任準科学者

1987年 ロチェスター大学 (ニューヨーク) 医学部に毒性学で博士号取得。マサチューセッツ州ウッズホール海洋研究所 (WHOI) 生物学部門ポストドクトラルフェロー。現在、WHOI専任準科学者。主な研究領域は、受容体を介した毒性の機序、化学物質への曝露に対する順応の機序と抵抗力の獲得、魚、鳥、および海生哺乳類におけるダイオキシン類および他の残留性有機汚染物質の毒性。

藤井 一則

独立行政法人水産総合研究センター 瀬戸内海区水産研究所 環境保全部 生物影響研究室長

1981年 宮崎大学農学部水産増殖学科卒業、1981~82年 三井製菓工業(株)、1983~85年 水産庁・研究部・研究課、1985~98年 養殖研究所・環境管理部、1998年から現職 瀬戸内海区水産研究所・環境保全部・生物影響研究室長。1999年 博士号 (農学) 取得。

タイロン B. ヘイズ

米国 カリフォルニア大学バークレー校 生物学科 準教授

米国サウスカロライナ州コロンビアで、1967年7月29日に生まれた。ハーバード大学にて学士号 (1989年卒業)、カリフォルニア大学バークレー校 (UCB) にて博士号研究 (1993年修了) を行なった。1995年に、UCBの統合生物学科の教員となった。現在は、両生類の発生内分泌学を中心とした研究に携わっている。野外および研究室での仕事を統合して、生態系内の変化に対する発生学的・生理学的反応におけるホルモンの役割と、それらの反応をもたらすメカニズムの発達の問題に取り組んでいる。野外研究は、米国南西部の砂漠地域、米国南東部の低湿地帯、アフリカのさまざまな生息域で行なっている。

ルイス J. ジレット Jr.

米国 フロリダ大学 動物学科 特別教授

フロリダ大学の動物学特別教授。1981年コロラド大学 (コロラド州ボルダー) にて比較生殖生物学で博士号を取得。生物学、発生学、生殖生物学の教師として受賞している。ジレット博士は、生殖生物学の分野、特に野生生物の生殖および発生内分泌に関する研究で世界的に認められている。アメリカ政府および海外の政府機関の環境汚染に関する科学政策アドバイザーを務めている。

平原 史樹

横浜市立大学医学部 教授、横浜市立大学医学部 国際先天異常モニタリングセンター センター長、国際先天異常監視機構 日本プログラム 副日本代表

1977年 横浜市立大学医学部卒業、研修後1979年より横浜市立大学医学部産婦人科学教室、1984年~米国メイヨークリニック・メイヨー医科大学免疫遺伝学教室リサーチフェロー、1991年~横浜市立大学医学部講師、1998年~横浜市立大学医学部産婦人科学講座教授、同附属病院副病院長、横浜市立大学医学部国際先天異常モニタリングセンターセンター長、国際先天異常監視機構日本プログラム副日本代表、日本母性保護産婦人科医会先天異常委員会委員、環境省「内分泌攪乱化学物質のヒトへの影響調査研究班」研究員。専門は、臨床遺伝学、先天異常学。

ポール A.L. ランカスター

オーストラリア ニューサウスウェールズ大学 婦人・小児保健学 準教授

小児科医として訓練を受けた後、1970年代シドニーのRoyal Hospital for Womenで新生児部局の責任者を務める。NHMRCフェローとして、2年間にわたりロンドンとパークレーで応用保健科学を研究した後、シドニー大学にてAIHW全国出生周産期統計学ユニットの責任者を務める。1979年~2001年ニューサウスウェールズ大学に所属。生殖および出生周産期の疫学者としての活動の中で、全国先天性異常モニタリングプログラムを立ち上げ、1983年には世界初のIVF妊娠の全国登録制度を確立し、オーストラリアの母親と新生児、先住民の母親と新生児、および生殖に関する健康についての全国的報告書をコーディネートした。1986年~1988年および1992年~1994年、先天性異常モニタリングシステムの国際クリアリングハウス委員長。現在、オーストラリア先天性異常学会代表。1990年~2000年人工授精の登録に関する国際作業部会を召集して議長を務める。WHO人類遺伝学に関する専門家諮問委員会のメンバーである。

フランク H. ピエリク

オランダ エラスムス大学ロッテルダム 公衆衛生学部 ポストドクトラルフェロー

健康科学者であり、1994年 ニーメゲン大学健康科学科を卒業する。1999年、男性不妊に関する診断法と治療の評価についての研究で博士号を取得 (ロッテルダム大学病院)。大規模な疫学研究における調整、分析、報告に携わってきた。特に、内分泌攪乱物質が男性の生殖能力と不妊、精子形成における内分泌機能のマーカーに対して与える影響に関心を持っている。現在、代表研究者として2種類の前方視的調査、すなわち内分泌攪乱化学物質への曝露と1) 潜在辜丸または尿道下裂、2) 精子の質との連関について調査を行っている (オランダ、エラスムス大学ロッテルダム、公衆衛生学部)。

デイビッド J. ハンター

米国 ハーバード大学 公衆衛生学部 疫学・栄養学 教授

ロンドン生まれ。オーストラリアのシドニー大学医学部で学び、その後、ハーバード大学公衆衛生学部にて1985年に公衆衛生学修士号 (M.P.H.)、1988年に理学博士号を取得した。1986年にハーバード大学公衆衛生学部で教鞭をとり始め、現在では、同学部疫学・栄養学の教授を務めている。長年にわたり様々な分野の専門家組織に任せ、現在はハーバード大学癌予防センターのディレクターを務めている。また、ハーバード大の公衆衛生に関連する委員会ならびに国内および国際的な諮問委員会でも活動している。Epidemiologyの編集委員会に参加しており、現在、ヒトゲノム疫学ネットワーク (Human Genome Epidemiology Network) の編集委員会のメンバーでもある。

武井 貞治

環境省 環境保健部環境安全課 環境リスク評価室 室長補佐

1991年 防衛医科大学校卒業、以降同大付属病院にて研修。1994~97年 エール大学外科学レジデント、1999年 医学博士 (表皮細胞におけるプロテインカイネースCのシグナルトランスダクションについて)。2000年 環境省環境保健部環境リスク評価室室長補佐。

ゲリー E. ティム

米国 環境保護庁 (EPA) 農薬・毒性物質予防室 学術協力・政策局 (OSCP) シニア・テクニカル・アドバイザー

ワシントンD.C.の米国環境保護庁 (EPA) 農薬・毒性物質予防室の学術協力・政策局 (OSCP) シニア・テクニカル・アドバイザー。1966年ルイジアナ州立大学にて生化学理学士号取得、1971年ミネソタ大学にて有機化学の理学修士号取得、1976年ハンフリー公共政策研究所にて修士号取得。1973年自動車大気汚染統制局テクニカル・アドバイザーとしてEPA入り、自動車への酸化触媒導入に関する問題を扱う。1978年～1979年にはエネルギー局の仕事を担当。1979年EPAの毒性物質局に入り、有害物質規制条例の化学物質試験に関する条項の導入に努める。化学物質試験支局では、班長、部門長を務める。1996年の食品品質保護及び飲料水安全法に基づいて、ヒトと野生生物の内分泌系を攪乱する可能性について化学物質をスクリーニングするプログラムの開発に助言を与える諮問委員会 (EDSTAC—the Endocrine Disruptor Screening and Testing Advisory Committee) のワークショップメンバーとサポート員を務める。現在は、EDSTACの勧告を実施するEPA内分泌攪乱化学物質スクリーニングプログラムの導入に尽力している。主に、試験方針の開発、スクリーニングと試験のアッセイ法の有効性検証、スクリーニングにかける化学物質の選定と優先順位設定のためのシステム開発を担当している。OECDの内分泌攪乱化学物質試験および評価に関するワークグループの米国代表でもある。また、化学物質の評価と協力に関する毒性プログラム省庁間委員会および3省庁による基金適用研究委員会を始めとする様々な政府省庁間のワークグループにおいて、EPA代表を務めている。

ジュディス A. グラハム

米国 米国化学工業協会 上席研究員・シニアディレクター

デューク大学にて生理学と薬理学で博士号を取得。米国化学工業協会の「ヒトの健康や環境に及ぼす化学物質の影響」に関する長期自主研究のシニアディレクター兼上席研究員を務めている。現職就任以前は、米国環境保護庁研究開発局に32年間在籍し、研究および研究管理の分野の要職を歴任した。数々の学会で役員に選出されており、現在は米国国立科学アカデミーの毒性学委員会の委員である。学術誌、学会抄録集および共著書に報告された論文は135件以上にのぼる。

キャスリーン キャメロン

英国 環境・食糧・農村地域省 (DEFRA) 化学物質・バイオテクノロジー部門 重要化学物質対策課長

毒性学の専門教育を受ける。以前は、保健省および欧州委員会環境総局に所属していた。現在は、英国環境・食糧・農村地域省 (旧英国環境・運輸・地域省) の重要化学物質対策課の課長および内分泌攪乱化学物質に関する政府省庁間グループの議長を務める。

ムスタファ アリ モハマド

マレーシア マラヤ大学医学部 薬学科 準教授

現在マラヤ大学医学部薬理学科講師。マラヤ大学医学部 Shimadzu-UMMC生体異物研究センターの創設メンバー/コンサルタント。マラヤ大学にて薬理学と植物化学で博士号取得。東アジア地域における環境モニタリングに関する国連大学プロジェクトでは、マレーシアの国内コーディネーターを務める。マレーシアの薬草、乱用薬物、高速液体クロマトグラフィー (HPLC)、揮発性有機化合物、分析技術のための試料標本など様々な問題を扱った文献を30冊以上出版している。主な研究領域は、内分泌攪乱化学物質、毒物学、分析薬理学、臨床薬理学、乱用薬物、薬草。